

<角倉了以（すみのくら りょうい）>

◇家系

角倉了以の祖は、近江源氏佐々木高綱の弟 厳秀で、近江の吉田の地（現在の滋賀県犬上郡豊郷町吉田）に領地をもらい、吉田姓を名乗った。一族が角倉を名乗るのは後のことである。吉田家は室町時代中期に上洛し、室町幕府お抱えの医者として務めた。

その後、医業で得た財を元に土倉業（金融業）を営むようになる。了以の祖父吉田宗忠は土倉業を長男に継がせ、次男に医者継がせた。この次男吉田宗桂が了以の実父である。宗桂は遣明使節副使の策彦周良（さくげんしゅうりょう）に従って入明している。了以の長男は角倉素庵、弟に吉田宗恂。吉田光由は一族にあたる。

◇生涯：1554年～1614年（天文23年～慶長19年）

角倉了以は室町時代の1554年（天文23年）に生まれ、算術・地理を学び、当時勃興してきた海外通商および国内の建設諸事業に進出した。特に、徳川家康の知遇を得て1603年（慶長8年）以降、数回にわたり朱印状の交付を受け、アンナン（ベトナム中部）とトンキン（ベトナム北部）地方に貿易船を派遣した。土木事業では1605年（慶長10年）に丹波と山城を結ぶ大堰川の開削を計画、翌年の1606年に完成させた。その後、幕命により富士川、天竜川の工事をを行い、京都の高瀬川を開削した。この結果、角倉家はこれら河川の通船支配権を獲得すると共に、搬出材木によって上方の有力材木商となるなど多大な経済的利益を得た。晩年、琵琶湖の疎水計画を立て、瀬田～宇治間の舟運と琵琶湖水位の低下による新田開発を図ったが、実現には至らなかったと言われている。

◇大堰川（保津川）の開削

長岡京や平安京の時代より、大堰川は丹波地方の杉・檜や翌檜（あすなろ）などの「丹波材」と呼ばれる良質の天然木を、都に届けるための筏流しの場として利用されていた。室町時代には京都で消費する材木の多くを丹波材で賄ったと言われている。

江戸時代になると京都・伏見・大阪などの都市が発達するにつれ、大堰川の水運はますます重要性を増し、水運量の激増に対応するために大堰川の流路の拡大が必要となった。しかしながら、急流な大堰川には巨岩が露頭している箇所も多く、舟を航行させるには膨大な資本を要する大改修工事が必要であった。

誰もが開削は不可能と考えていた中、朱印船貿易で財をなした豪商 角倉了以が立ち上がる。了以は岡山県の吉井川水系の和気川で見た舳先（へさき）が高く、船底が平らな船（後の高瀬舟のモデル）を見て、この船なら大規模な開削をしなくても大堰川を通ることができるのではないかと考えた。このことが大堰川の開削を決断したきっかけと言われている。

1606年（慶長11年）に、了以が幕府に大堰川の開削と通船を嘆願したところ、幕府は「古（いにしえ）より、未だ船を通ぜざるところ、今開通せんと欲す。これ二州（山城と丹波）の幸いなり。宜しく早くこれをなすべし」と許可を出している。工事の様子は林羅山が、「水面の突き出した大きな岩は火薬で爆破し、水中の岩は真上に櫓を組んで数十人の人足が先を細くした鉄柱で突いて砕いた。」と了以の記念碑に記している、1606年3月に着手した工事は同年8月に終了している。

◇参考文献

- 1) 小学館：日本大百科全書，1994.
- 2) 宮田 章：角倉了以の世界，(株)大成出版，2013.4.
- 3) 日本経済新聞：Next 関西 culture，1998.8.4(夕刊).